

2023年 富田林市立図書館から、5・6生へ

夏のおてがみ

図書館には、楽しい本がたくさんありますよ。

夏休みに、遊びにきてくださいね。



『アマゾン川 熱帯雨林・生命の源』

サングマ・フランシス／文
ロモロ・ディポリト／絵
ゆら しょうこ／訳
徳間書店



アマゾン川は、一日あたりに海に流れ込む水の量と、川の周りの地域の広さが、世界で一番大きな川です。アマゾン川には、珍しい生き物もたくさん住んでいます。「アマゾンカワイルカ」は、細長くとがった口と、ピンク色の体が特ちょうです。残念なことに、アマゾン川に住む多くの生き物は、人間による環境破壊や乱獲のせいで、大きく数を減らしています。

『トーキングドラム』

—心ゆさぶるわたしたちのリズム—
佐藤 まどか／著
PHP研究所



六年生のマッキーは、近ごろ親友と口をきいていない。家では家族がバラバラで早く大人になりたいと思っている。放課後子ども教室では高学年が四人だけで、かたみが狭い。そんな中、放課後子ども教室の高学年の一人で、おとなしい健太が作りはじめたパーカッション(タイコ)がきっかけとなり、マッキーの毎日がかわり始める。

『アグネスさんとわたし』

ジュリー・フレット／文・絵 横山 和江／訳
岩波書店



春、わたしは、かあさんとふたりでひっこしてきた。野原のおこうにある家には、アグネスさんというおばさんがすんでいる。夏、わたしはアグネスさんの家に遊びに行く。わたしは絵をかくのが、アグネスさんは土でものをつくるのがだいすきだ。ものづくりをとおし、二人の友情とカナダのグリー族の文化が秋、冬とふかまってゆく。

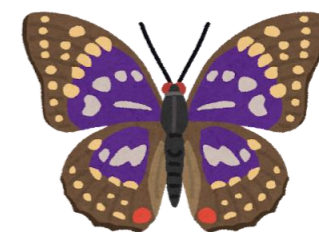
『クリシュナのつるぎ』 —インドのおかしなばなし—

秋野 癸巨矢／文 秋野 不矩／絵 BL出版



おかし、カンサという悪い王さまがいました。神さまは人々を助けるために、女の人の腹にやどり、地上に生まれ出ることになりました。カンサ王の追手から無事に逃れ、クリシュナと名付けられた子は、すくすくと成長し、十八になると王を討つために宮殿に向かいます。カラフルな色使いでインド神話の世界が楽しめる絵本です。

『オオムラサキと里山の一年』



—夏の雑木林にかがやく、
日本の国蝶—
筒井 学／写真と文
小学館

オオムラサキは、子どもの手のひらほどの大きさで、かがやくようなこん色の美しい蝶です。イモムシのまま冬をこし、次の夏にさなぎになり、美しい蝶となって飛び立ちます。蝶になるまでにはなんどもだっ皮をくり返し、たくさんのこんなんをのりこえます。成長のようすと、おそいかかる自然のきょういを本で観察してみよう。



『小学生のための初めての』

「クラシック音楽」

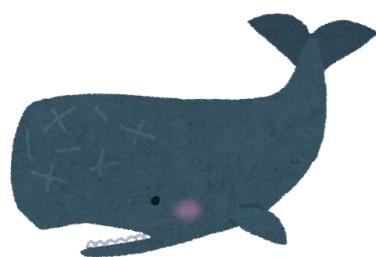
「子どもとクラシック音楽」
研究会／著
メイツユニバーサルコンテンツ



ピアノの詩人と称される、フレデリック・ショパン。彼の名前も音楽も一度は聞いたことがあるでしょう。ショパンはわずか39歳の短い生涯の中で、ピアノ音楽に革命をもたらしました。平昌オリンピックで羽生結弦さんが金メダルをとった時に演技したのも、ショパンの曲でした。この本にはショパンの他にも沢山の偉大な音楽家たちが紹介されています。

『クジラの進化』

水口 博也／文 小田 隆／絵 木村 敏之／監修
講談社



クジラは、海にすんでいます。ヒトと同じ哺乳類のなかまです。約6000万年前、恐竜たちが絶滅したあと、生き残った哺乳類は生活場所を広げていきました。なかでも海へと進出したのが、クジラの祖先です。かれらは長い時間をかけて、水中での暮らしに適応していきました。その進化の過程をたどっていきましょう。

『宇宙食になったサバ缶』

小坂 康之／著 別司 芳子／著 小学館



野口宇宙飛行士がYouTubeで宇宙日本食のサバ缶を紹介し、話題になりました。そのサバ缶を作ったのは、福井県若狭高校の生徒でした。宇宙食になるには、厳しい条件をクリアしなければいけません。宇宙食サバ缶の開発が始まったのは2006年、生徒たちは実習と研究を重ね、技術を引き継ぎ、14年かけて夢を叶えました。

『本おじさんのまちかど図書館』

ウマ・クリシュナズワミー／作 長友 恵子／訳 川原 瑞丸／絵
フレーベル館



ヤズミンの楽しみは、学校帰りにまちかど図書館で本を借りることです。この図書館は元教師の本おじさんが、自分でコツコツ買い集めた本を、読みたい人に無料で貸してくれます。しかし、本おじさんがまちかど図書館を続けることができなくなってしまいました。ヤズミンはまちかど図書館を守るために仲間と一緒に知恵をしぼります。

『キッチンラボ どうしてそうなる？』

実験レシピ 調味料編』

露久保 美夏／著 偕成社



科学っていうとすごく難しく聞こえるよね？でも、ふだんからみんなが食べているものも、科学の知識がつまっているんだ。クッキーにカップケーキにソーセージ。すこしやり方を変えるだけで、ずいぶん違う様子になるね。この本では調味料の量を変えて実験していくよ。一緒に見て、感じて、味わってみよう。君もキッチンラボへようこそ！

『くらべて発見 くだものの「おなか」②』

ブドウやカキのなかま』

農文協／編 山中 正大／絵 農山漁村文化協会



ページをめくると、ブドウやカキの「おなか」(断面)の写真を、たくさん見ることができます。ブドウの粒のおなかを見てみると、タネのあるものと、ないものがあります。タネがない方が、食べやすいですね。タネなしブドウにするために、生産者はある特別な液を使っています。まだまだ知らない、くだもののヒミツも知ることができますよ。

『雪の日にライオンを見に行く』

志津 栄子／作 くまおり 純／絵 講談社



小学五年生の唯人は、父親が家族を置いて中国へ帰ってしまったので、母親と二人で大阪に住んでいる。唯人は何をしてもうまくできないのだが、なんとか学校に行く日々をすごしている。そんな唯人のクラスにアズという女の子が転校してきた。ある雪の日、唯人は天王寺動物園に行くというアズについていく。

読み継がれてきた名作

『100万回生きたねこ』

佐野 洋子／作・絵
講談社 1997年



100万回も死んで、100万回も生きたねこがいました。りっぱな、とらねこでした。あるときは、王さまのねこ。また、あるときは手品つかいのねこでした。誰のねこになっても、ねこは、その生活に満足することはありませんでした。100万回死んだあと、ねこは初めて一緒にいたいと思える、大好きな相手に出会いました。

